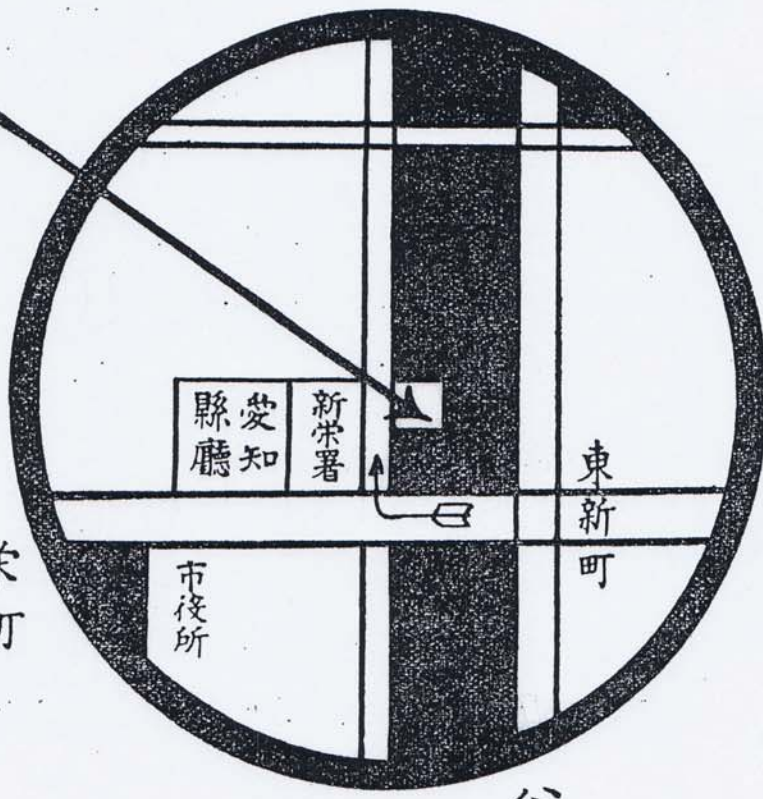


校報

昭和五年 九月 號

校舎ノ改築成ル、時ハ是レ燈火親シムベキ
秋、若キ好學ノ士ヨ來リテ我校ニ就ケ

新栄町



栄町

光輝アル二十年ノ歴史ヲ有スル
電氣工學専門ノ

公園

夜間部

新學期開始

十月八日

入學式

豫科一年ハ

無試験

他學年及ビ晝間

部各年編入ハ試

験ノ上入學ヲ許

ス

詳細ハ規則書ヲ

見ラレヨ

問合セハ下記ヘ

名古屋市新栄町三丁目

名古屋電氣學校

電話東一七番

學 校 通 信

東の校舎改築成る

七月二十日に着手した我校の東の校舎の改築は豫定の如く九月一日完成した。七日の學期試験當日から使用することになつてゐる。見るからに明るい感じのする清楚な建築で、こんな立派な教室で勉學できる諸君は幸福である。どうか諸君の校舎を大事にしたい。ききたい。

休 みの 利 用

九月末の試験休みは、季候も良くむだに過すのは惜しい。諸君は各自の工夫によつて此の貴重な休みを活かして欲しい。不得手な學科に力を注いで復習するもよく、或ひは來るべき新學期の豫習をするもよい。それともつと自由に自己の興味を赴くまゝに、他の方面に独自の研究を進めることも、圖書館を利用して健全なる文學書を読みうるはしき情操を養ひよき書物を通じて偉大なる人々の言行に教へらるゝのも甚だ結構である。家事の手傳ひをすることができれば更に結構である。

健康のすぐれぬ者はこの休みにゆつくり静養して体力をつくることも急務であり、無病者も近郊の山野を歩いて日光を浴び、新鮮な空氣を吸ひ、身体を鍛へ健康増進をはかることをすすめる。ともあれ、折角の休みを徒らに過して、かへつて怠け癖をつくる如きことの無きやう注意し、更に進んでは右の如き積極的な活用を期せられたい。

本校卒業生中の異彩

創立以來二十年の歴史を有し、毎年晝間部夜間部二回づゝ有爲の士を世間に送り出してゐるわが名古屋電氣學校はその二千數百名に近き卒業生の内に幾多の變り種を有し、各方面に異常な天分をもつ人士を輩出せしめてゐるが、その多くは餘り世人の知るところとならぬ。否、世間のみでない。學校自体さへ、そのやうなすぐれた卒業生の業績を知らずに居ることがある。よきものは總じてけばくしく人目に立たぬ。金鑛は地に深く埋れてゐる。併しながらよきもの、すぐれたるものは何時かはあらはるゝのである。鬼頭史城君及び行岡歳郎君の事が最近新聞紙上に報導された。新聞紙上に記事としてのるか否かは恐らく大した問題ではあるまい。しかしよきものが、すぐれたる業績が、それによつて廣く世間に知られることはうれしいことである。兩君を引き合ひに出すことは失禮に當るかも知れぬが、かくの如き眞摯なる研究者發明者を卒業生として有するはわが校のよろこびであり、かつ又それが在校生諸君へのよき刺戟となることを思つて左にその新聞記事を掲ぐることにした。

數理の天才博士らを驚かす

斯界の宿題を解いた獨學の人

|| 鬼 頭 史 城 さん

昭和電力線路課技手鬼頭史城氏は世界電氣學界多年の宿題研究となつてゐた發電所に於けるロス(電氣の消失)に關する論文を作り斯界にセンセーションを捲起すに至つた。氏は小學校卒業後名古屋電氣學校に學んだ。けで東邦に

入社し計畫課に勤務することになつてはじめて電氣数理の必要に迫られてその研究にぞりかゝつたもので爾來獨學をつゞけ英、獨、佛の數學原書を讀破し基礎をつくり今日この一大發見をするに至つたのであるセオリーは三個よりなりロスは吸水管タービンの振動によつて生ずることを發見しこれが數式を完成したもので氏は先年アインシュタイン來朝の際相對性原理を反駁せんとした某學士の理論の缺點を指摘し既に會社内一部の間にその天才的數理學者としての天分を認められてゐたが讀書發電所の竣工に際しロスの絶無を思ひ立つたのが動機となりこの研究に着手し第一回發表として日立雜誌に書いた論文により東京帝大内丸最一郎博士に認められ昭和から現職のまゝ派遣されたと云ふ経路で大學助手の席を得て自由に研究が出来るに至り遂にこの一大研究を大成したものである氏は大正七年三月の電氣學校卒業で二十九歳の青年である。昭和五年八月十五日名古屋毎日新聞記事。

鐵道界に革命を齎す

自動制御装置の發明

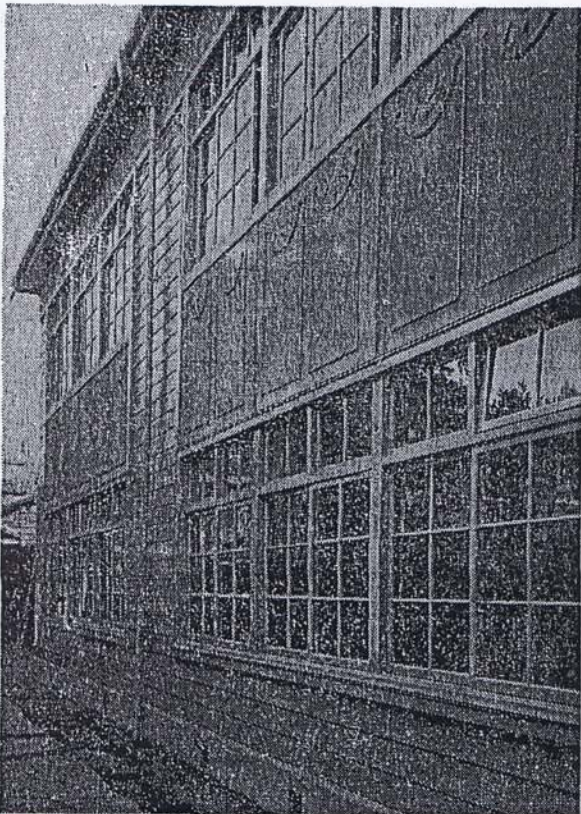
僅か二十五歳の白面の青年

行岡歳郎氏の研究完成

わが國鐵道の電化は多額の費用を要するのでそれに代るべきガソリン化ディゼル化の研究が各専門家の手でなされつゝある矢先それらの人々をアツといはせる發明が三重縣飯南郡神戸村垣鼻矢田工作所に勤めてゐる二十五歳の白面の青年行岡歳郎氏によつて完成特許局へ登録申請をなすも、もに目下その模型の製作を急いでゐる、行岡氏は大正十一年名古屋の電氣學校を出るころより車輛の自動制御装置の研究を始めてゐたが一昨年ふと手にした外國の門雜誌により世界あげてこの研究をなしつゝあることを知りそれに刺戟され爾來同研究に寢食を忘れていそしんだ結果やうやく完成したもので同發明の名稱は内燃軌道車輛の自動制御装置といひ從來總て人間の手足で動かしてゐた内燃機關(ガソリン、重油など)を原動機とする車輛の連軸機變速機道輪器燃料加減機などの制御を電力脈搾空氣を利用して僅かにスイッチを閉閉することによつて自動的に制御することが出来るのみならず同發明によることこれまでは一車輛に原動機一個より使用することが出来なかつたのを四個まで

ふやすことが出来それに應じて車輛の大ききトン數を増加することが可能でまたこれまでには列車編成即ち連結運轉は不可能であつたが右によると幾つでも連結運轉が出来同時に總轄運轉が前方からでも後方からでも出来る故にこの發明を利用すれば閑散線のみでなく主要線路のガソリン化ディゼル化をはかることにならうと期待されてゐる。行岡氏は大正十一年名古屋電氣學校を卒業大倉土木會社機械部に勤めたがその後を退職伯父が經營してゐる矢田工作所に勤める傍ら右研究を完成したもので七日同氏を工作所に訪へは喜びをつゝみながら語る「何といつても將來の鐵道はガソリン化ディゼル化にあるが制御装置が人爲的なために普及せざるにゐたものである僕はこれを總て自動的に操縦するやうにしたらさんないゝたらうと思ひ研究をつゞけたものです自分の口から變ですが全く鐵道界の一革命をもたらすものと確信してゐるこれによつて費用の節約をはかり電化と同様の効果をあげることが出来る自分としてはたゞ研究したゞけで満足してゐたのですが先輩から進められ發明協會の手で調査してもらつたところ各車輛會社で研究中とわかり一足早く特許登録を申請したので今受付けたこの手紙が来たところです。

昭和五年八月八日大阪朝日新聞記事



北側から見た新校舍

女性 の 力

五 風 山 人

『女は弱いされど母は強い』といはれてゐる。女性の一念は巖をも徹す。決して男子のみが強者ではない。昔から今日に至るも、或は、東洋にも西洋にも、女の力が隠れたる大きい功勞を積んでゐる例に乏しくない。まことに世界文化建設の一半の勞は婦人の力に頼るものといつても決して過言ではあるまい。今、その實例一つを左に述べよう。

それは只今の三井家の祖三井高俊の妻殊法大姉のことである。

× × × × ×

今の三井家の基礎を築いたともいはれる三井高俊の妻、殊法大姉は、約三百年前、伊勢の松坂に夫と共に酒屋を業としてゐた。四十餘の時に、柱とも頼む夫に死別して以來、後家となり、多勢の子供をか弱い女手一つで養育しつゝ、自ら家業に精出した。朝は四時に起きて神佛に祈りを捧げ自ら儉約の手本を示して、一心に商賣に勵んだ。お客には親切と丁寧とを以て接し、自分は一毛一厘を節約し、廢物を巧みに利用して一物を捨てず、専ら家業を愛してその繁榮に赴くやう勤勉力行した。八十七の高齡で歿するまで營々と活動して遂に三井家今日の地盤を建立したのである。

かの女が、『廢物を巧みに利用』したことは有名なもので、女のもどゆひの切りくすをつなぎ合して、こよりとした如き、或は、すり鉢の底ぬけは樋の受筒に用ひ、水ひしやくのぬけ底を土瓶しきに利用した等の如きことは彼の女の儉

徳の一端を示すに十分であらう。併しかゝる行は尙以て萬人の範とするには足らない。が、次の行に至つて始めてこの女性の平凡人でないことを實證して餘りあると思ふのである。即ち、

『殊法夫人は、四十以後、一切のなまぐさ物を斷ち常に精進物を口にして、篤く神佛を信じ、八十七才で歿するまでの後半生凡そ五十年間を、毎日、寒中でも朝は午前四時に起き、必ず水浴をなして後、神佛に祈願をこめた。

この行持、この不斷の勇猛精進である。この難行修業こそ實にこの殊法夫人の一大德行と稱すべきであらう。今日の新しい女よ、之を如何と見るか。

(昭和五年九月五日記す)

電車内の人間學

こ わ だ

「老人や子供に席をゆづるのは軍人と學生だけで、洋服着て眼鏡かけたやうな奴らばちつさも席をゆづらん」と二人づれの男が私の傍で話してゐる。私は洋服を着てゐたが立つてゐたら其の人の言葉が私に向つて放たれたわけではない。しかし良き、ましめの言葉として聞いた。

重い荷物を持つて困つてゐるやうな人にもなるべく席をゆづりたいものである。病人は云ふまでもない。

2

電車の中で隣りの人が本を讀んでゐる。何を讀んでゐるのかと一寸のぞいて見たくなるが、なるべくのぞき見をせず、しむのがうはしい禮儀である。チラと見るくらゐならまだしも、いつまでもいつまでものぞき込んでゐるやうなことは絶対につしまればならぬ。他人の家の中をのぞき込むのと同様にその人の人格の劣さをあらはすことになる。

唐 詩 妄 評 (四) 杏西 散人

楓 橋 夜 泊 張 繼

月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

訓 月落ち烏啼いて霜天に滿つ、江楓漁火愁眠に對す、姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る。

意(先人の解) 客舟にて夜に倦むの詩にて決して夜の明け

んとする時にあらず、月落ちて烏が鳴く故に夜の明けんとするのを喜んだが、江に沿ふてある楓樹の邊りには魚を漁する火が幾箇か有り鬱々と睡つてゐる、客船へ今聞えるのは半夜の鐘である、して見ると曩の烏の聲は月夜鴉で有つたのか。

又舊説に、霜夜客中鐘聲の太だ早きを怨むる詩で、夜半鐘聲の字を眞の夜半と爲すは當らず、詩人の活語を解せざる者なり。

前記の如く此詩には二様の解釋があります、そして三體詩講義には次のやうな意味が掲げてあります(煩を省く爲めに抄録す)

陸放翁は其著老學庵筆記に於て、歐陽修は張繼の詩を嘲りて「句は則ち佳なり、其の夜半は是れ鐘を打つのにあらざるを如何せん」と言ふと雖も宋には分夜の鐘を撞かざるにせよ唐代には夜半の鐘を撞きし例數多あり皇甫冉の秋夜の詩にも『秋深臨水月、夜半隔山鐘』等々是なり云々

併し陸放翁の此議論は唐代に分夜の鐘の有無を論じたるま

で、あつて張繼の詩が夜半の詩なりや曉の詩なりやの問題に就ては餘り截然たる斷案を下して居りませぬ、此問題を明白に夜半なりと言ひ切つたのは日本の僧五岳でありまして該講義に載する彼の七絶一首の結句には「誤認三更爲五更」と喝破して居ります、そして其後の詩人は多く此解に従つて三更説を支持し夜半鐘聲は眞の夜半の鐘を意味し決して曉の鐘を聞いて夜半の鐘なりと言ひ做したものでは無いと解して居ります。

併し此詩は實際夜半の感想を叙した詩と見えるでせうか、私は舊説の「霜夜鐘聲の太だ早きを怨むる詩」といふ解釋を何處までも支持する一人であります。

先づ試に此詩の夜半の字に換ふるに五夜又は戊夜(共に五更を意味する仄字)の字を以てして此詩を一誦して見て下さい、詩は勿論平凡化しますけれども曙の詩としてスラスラと能く通じる詩では有りませぬか、是が何んで三更の詩でせう、詩人五岳の見方は些しく誤つて居るやうです。

愁眠(此解は後段に叙す)中とは言ひながら、月の落つるのを目にし鴉の鳴くのを耳にし霜威の迫るのを身に感ずる此の起句の實感は大だ根強く道破せられたものであつて決して『月夜鳥であつたのか』など、手軽く一抹に消殺せらるべき文字では有りませぬ。

儻し『月夜鳥であつたのか』と結句から起句へ振り返へらせやうと云ふやうな趣向であつたならば起句は當然モツと手軽く拈出さるべき筈で、月落又は霜滿天を今少しく物軟らかな控え目に響く字に作られて居なければなりません然るに冒頭からして強く響いて居ります、御覽なさい月落

の二字が共に入聲の音で有ることを、今更言ふまでも有りませぬが入聲は他の三聲に比して吾人の耳朵に強く響き牢固たる印象を與へる字です、讀者が一たび月落烏啼と誦じ去つて其の腦底に強く曙色の催したる状態を印象する以上更に誦じ續いて結句に至り夜半の二字に接すればとて其れが何うして眞の夜半と受取れませう、此處に於てか此の夜半の二字に鐘聲の太だ早きを怨むる意有ることを知覺し、豁然として詩意を解し得たる時、其處に始めて此詩の詩味津津有味たることが判るのであります。

併し、起句の叙景は成る程曙に相違ないが左様すると次に出て来る漁火の字は何うだと反問する人が起るでせう、三更説に傾く人は單に、夜半の字に眩惑するばかりで無く此の漁火の字にもアテられて居りますから此矛盾は當然起るべき筈です、が、詩には押韻の都合、聯語(洋詩)若くは平仄(漢詩)の都合で句が前後したり語が顛倒したりするのは左のみ珍らしい事では有りませぬ、語に就いては前回に擧げた孟浩然の『花落知多少』は『知花落多少』又は『知多少花落』であるべき所を平仄と押韻の關係で斯うしたもので而かも意義は前者必しも後の二者より不分明とは言はれませぬ、句に就ては第一回に擧げた司空曙の江村即事の起承に於ても本来ならば『罷釣歸來、江村月落正堪眠、不繫船』の順序に置かるべき文字であります、又雍陶の過南隣花園詩の『莫怪頻過有酒家、多情長是惜年華』は理として承句が起句にあり起句が承句に在るべき筈です、其他今一寸好適例を思ひ出させぬが、要するに此の楓江夜泊の詩も正に其の類でありまして承句は起句に在るべきを押韻平

仄の都合上斯うしたものでせう、又漁火の一句は解義上必しも起句に置くべき事を要せず承句に在つて然るべきものと解しても一向差支は有りませぬ。

隨て我等五更説を支持する者の解釋は次のやうになります(承句を起句に在るべくと解し又は承句に在つて然るべしと解する二者何れでも能く通じますから左の解の中に之を括弧して二重に入れて置きます)

(江楓と漁火の相反映してゐる景色の見ゆる)客船の愁眠中に月も落ち烏も啼いて霜威が身に迫つて來た、(併しまだ消えやらぬ漁火が江楓に映じてゐる)、寒山寺あたりから撞き出した鐘は早や五更の鐘では有るが眠くてまだ夜半の鐘に思はれる。

以上の解釋を、詩意を汲んで今少しく敷衍しますと次のやうに餘情を見出します。

船底は浮鷗の搖ぐに似て眠を催すこと切りなれども曲肱の枕は石の如く硬直して夢を破ること早し(愁眠の解)、既に西窓に月の落つるを知り更に霜天に烏の鳴くを聞けども、江上の漁火は尙ほ紅楓を照す有り、夜か曉か、半醒半睡意識朦朧の睡郷裡、突如曉鐘に接し心耳詩機動く環境は畢竟曙色なれども心境は正に是れ夜半なり。

正覺せる曙色を愁眠の爲め錯覺的に夜半なりと言ひ做したる手法の技巧、之をミルトン詩中に求むるも多く其の儔を見ざるべく、愁眠に呼應せる夜半の二字は燦として夜光を放ち眞に是れ數百カラットのダイヤモンドに値ひする者です。

初め此詩を一誦するや詩意模糊として恰も桃花源裡に津を

問ふかの如き感を惹くことは何人も否む能はざる所なるべきも再誦三誦遂に其の詩的錯覺を巧叙せるものなる事に想ひ及ぶ時此に始めて油然として詩味の湧くを覺え吟咏久しきに亘つては自ら是れ蘭麝香高き處天酒を汲み醜酬を嘗むるの味ある事を解得します、之をしも三更の詩なりと見るが如きは畢竟金を點じて鉛と成すの類です。

明治に及んで支那を遊歴したる人に依りて烏啼は山の名である故に『月は烏啼に落ちて霜天に滿つ』と讀むべき詩であるといふ説が出て今は大方の詩人が此の説に傾いて居るやうです、地理に暗い私には判定が付きかねますが、幸に烏啼を固有名詞と見ることが出来れば一入好都合だと思ひます、全体烏が啼くといふ事は烏の聲の悲しく聞ゆる時に用ふる字で明け鳥の聲は寧ろ喜ばしく聞ゆる筈のものでありますから、本來ならば月落烏啼と有つて然るべきです、それを古來より月落烏啼で通つて來てをるのは全く烏啼が山の名であるからかも知れませぬ、私は啼と鳴との用語上の解釋から烏啼を山の名と看る方に賛成したのであります但し辭つて置きますが烏啼が固有名詞で有らうが無からうが、此詩の解は五更説たることに寸毫も變りは有りませぬ愁眠の二字は實に此詩の核心でありますして全詩は畢竟此の核心の輻射に過ぎませぬ、而して此二字の解に就き現代漢學の權威某博士の字典には態々此句を引例して『心配しながら眠る、憂き思ひの眠り』といふやうに解義がして有りますが普通の用語としては兎もあれ、此句の愁眠を其のやうに解されては詩趣の強半を減殺しはしますまいか、題は夜泊とあれども旅愁を叙するやうな關聯の文字は一つも此

詩に見はれて居りませぬ。隨て愁眠の愁を心配、憂ひなど、餘りに安價に解しつ放しにして置く事は決して此詩に對する忠實なる解釋とは得信じませぬ、私は矢張り前掲の私の解の如く『眠りを催すこと切りなれども、夢を破ること早し』の苦眠の意義たることを主張します。

其れから、一説に『江楓を江村に作れる者あり』との註が載つて居りますが、思はざるの甚しき者です、此句の對の字の味ひが判らぬと得て其んな事になります、初めに載せた先人の解の中にも江楓漁火の四字を『江に沿ふた楓樹の邊りに魚を漁する火が幾箇か有り』とサラリやつて退けてあります、是れもチト心無しの解だと思ふくらゐです、江楓の二字は人をして江頭の紅楓を想像せしむる字で、江楓と漁火とが相反映しそれが又遠く客船にも反映して居るといふ眞に一幅の洋畫を觀るが如き風光を僅かに對の一字に結束して居る名句でありまして、此の對の字は實に江楓、漁火、愁眠の人(即ち客船)の三者を緊接する修辭上絶好の楔子であります、此の畫の如く花やかなる江楓の字を江村にして仕舞はふなどは打毀しも程が有ります。

此詩も、又第一回に擧げた江村即事の詩も、共に『先』韻であります、『先』韻は他の平韻に比して遙かに啻調を保ち人の唱和に伴ふて餘韻自ら琴線を撫するが如きものがあります、洋詩の $\times \times$ を語尾に持つ字を押韻とする詩(例せばオーランシャインの如きが口ざはりにも耳ざわりにも和やかにして萬人に愛誦せらるゝ事多きが如く、這種先韻の詩が吟誦上特種の風韻を添ふる事も亦此詩の特長です。明の萬曆製煎茶々碗五客に此の楓江夜泊の詩を書したる物

が今日數千金の價格を有するのは固より其素質その物が珍器たるが故ではあらうけれども一つには其碗銘の夜半の鐘聲が雅俗を通じて一般的に知悉せられてゐるからでありませう。

私の平素愛誦する唐詩の中にはまだく、妄評を加へたいのが多々ありますが徒らに讀者を倦ましむるのは要無き事と思ひますから一ト先づ此に擱筆します。

十錢白銅と星空

F G H

夜になつたばかりの都會の大通りである。片足の不自由な、年の頃七十に近い汚い老人が杖をたよりにびっこひきつゝ歩いて行く。云ふまでもなく道行く人々に助力を乞うて辛うじて生きるあはれな人たちの一人である。職業的になり、すれつからしになつた無耻の乞食でないことはその寂しさそのもの、顔色で分る。

彼は一度びその人を追ひ越して行つたが、しばらく歩いて立ち停つた。考へた。ズボンのかくしから十錢一つつかんで老人の方へ引返す、手を差出すと老人は掌にそれを受け提燈の明りで見るとしかつたが、直ちにかすかな驚きの色を示した。彼の期待したのは決して白銅ではなかつたのだ。老人の手がうごいて右手の提燈を左手に持ちかへるらしい。彼はそこまでは見た。恐らく老人は感謝の心を合掌のかたちで表はさうとするのであらう。老人の實に心貧しき(ハンブルな)善良な眼ざしを見た彼は、その合掌に向ふ

ことが心の深い奥の方で恥ぢられた。世間的な、又道徳的な羞恥などではない。赤面するのは顔でなくしてごこ胸の奥である。

慈善をなしたなどと彼は考へてはゐない。彼は施しをしたと云ふ心持が如何に人間の思ひ上つた、あさましい心であるかを知つてゐる。特にいはゆる貴婦人の慈善道樂にははげしい嫌惡を感じてゐる。

足の不自由な老人と青年の歩みとはしばらくにして彼を遠く老人から離れさせた。しかも彼の背後からはあの尊い合掌が無限の速さで追ひかけて来る。それを彼ははつきり彼の背中に感じた。よく晴れた空で星の光が澄んでゐる。そいつを見上げて歩いたら泣けて來さうだつた。

彼の享受するコーヒー一ぱいの——これは必ずしも生きるに必要なものではない。せいたくとも云へるのだ——金高が事によるとあの人の一日を支へる金高なのではないか？ 否、事實はもつとひどいかも知れぬ。十錢は十錢に等しい。しかも、この等しさの如何に等しからざるかをわれわれは考へねばならぬ。このまゝでいゝのか？

彼の尊敬するA氏は「このまゝでいゝ」と云はれる。A氏は六十に近い。彼は二十代だ。彼が「このまゝでいゝ」と云へるやうになるには未だ四十年を要する。

この地上に生きる者、すべてが不當なる苦しみを負はさるゝことなく、相共に正しく明るく楽しく生きる日は何時來るか？ その夜彼はコーヒーをのますに歸つた。

彼は今佛陀のことを思ひつけてゐる。

(一九三〇 九月六日)